家庭数

令和元年 11 月 1 日

芝山小だより

11月号
清瀬市立芝山小学校
校長　　清水　一臣
http://www.kiyose.ed.jp/ koo7/

読書の秋　―読書週間にあたって・・・校長のお薦め本―
～『生き物の死にざま』「すべては「命のバトン」をつなぐために―」～

校長　清 水　一 臣

先日、４年生の児童から「校長先生、私今『佐賀のがばいばあちゃん』を読んでます。」と声をかけられました。学校だより９月号で「人は誰かとつながって、だれかを笑顔にし、幸せにするために生まれてきた」という言葉と共に紹介した島田洋七さんが書いた本です。まさか、子供たちが読んでくれるとは思っていなかったので、とても嬉しくなりました。

１０月２１日（月）～１１月１日（金）の２週間は本校の読書週間でした。この間、芝山小では、図書委員会が全校朝会やお昼の放送で周知するとともに、低学年に読み聞かせをしたり、ポスターを作って掲示したり、人気の本を紹介したりしました。また、11 月には放送委員会の司会で、給食時間中に各学級のお薦め本の紹介が行われます。このように芝山小学校では、子供たちの読書意欲を高めるために様々な取組を行っていますが、一方で他校に比べて本校に本好きの子供が多いのは、ひとえにご家庭の働きかけの賜物と感謝申し上げます。

私は 2 学期の始業式に子供たちに『生き物の死にざま』（草思社　稲垣栄洋著）という本を紹介しました。表紙帯に「すべては「命のバトン」をつなぐために―」と書かれています。この本は、セミやサケやカゲロウやカマキリなど、様々な動物たちが子孫を残すために、限られた命を懸命に生きる姿が動物ごとに短いエッセイとして綴られています。私はこの中で「ハサミムシ」のことが書かれた章を子供たちに紹介しました。ハサミムシは石の下や枯草の陰などに生息する小さな黒い昆虫で、尻尾の先がハサミ状になっているのが特徴です。このハサミムシ、人間が石をどけて見つけると、慌てて逃げだすものもあれば、人間に向かってハサミを振り上げて威嚇して来るものがあります。作者によれば威嚇して来るハサミムシの多くはメスで、よく見るとかたわらに卵を抱えていることが多いといいます。実は、このメスのハサミムシは母親で、大切な卵を守るために人間に立ち向かって威嚇するのです。ハサミムシは昆虫の中では珍しく、子育てをする昆虫で、例えば毒針を持つサソリや肉食の水棲昆虫であるタガメもその仲間です。このような昆虫は厳しい自然界で子育てをするために、自然界からいわゆる“武器”を与えられているのです。ハサミムシはハサミという武器をもらって子育てをする生き方を選んだと言えます。ハサミムシの母親は、卵を産むと父親なしで一人で卵を温めます。石の下で産んだ卵に覆いかぶさって寒さから卵を守り、カビが生えないように丁寧になめたり、空気に当てるために絶えず卵の位置を動かしたりします。その日数はおよそ 40 日間と言われています。40 日間もの間、ハサミムシの母親は餌を口にすることもなく、片時もそばを離れず卵を守り続けます。そして、ついに、卵から待ちわびた愛する子供たちがかえったかと思うと、母親の最後の仕事が待っています。なんと、自分で餌をとることができない孵化したばかりのハサミムシの幼虫たちは、空腹に耐えながら、甘えてすがりつくように母親の体に集まり、その体を食べ始めるのです。母親は逃げるそぶりも見せず、むしろ子供をいつくしむかのように腹の柔らかい部分を差し出すのです。自然界の厳しい掟とはいえ、また、本能で生きている昆虫とはいえ、私は母親の自己犠牲のすがたはすべての生き物に共通するもののように思います。

この本を通して改めて命の尊さや生きることの厳しさを感じました。多くの人に読んでもらいたい一冊です。